府立柴島高等学校

学校経営推進費　評価報告書（最終）

標記について、下記のとおり提出します。

１．事業計画の概要

実施課程名	全日制の過程
取り組む課題	生徒の学力の充実　→　生徒の希望する進路の実現
評価指標	①希望進路実現率の向上 ②授業アンケートと総合学科アンケートにおける生徒の授業満足度の向上
計画名	「夢をかなえよう　ＫＵＮＩＪＩＭＡ　ＳＴＹＬＥで」

２．事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	１　主体的な学習に向けた授業改善の推進 （１）「協働」をモチーフに授業改善をさらにすすめ、主体的に学ぶ力（生徒自らが考え、理解し、次に学びたいことを見つけ出していける力）を育成する。 ア　学力育成部を核として学習力向上に向けた新たな授業形態への改善をはかる。 イ　学習者の視点に立った、教材の研究・開発をする。 ウ　学習方法や方略を獲得させ、生活習慣を見直すことで、学習行動を促しその習慣化を図る。 エ　視聴覚機器を積極的に整備し生徒の発表する場面を増やす。そのことにより表現力を育成し主体的な学びの姿勢を強化する。（授業アンケートで検証） （２）ユニバーサルデザインを意識した教育環境、授業づくりを推進する。 ア　全教職員で全ての生徒がわかりやすい授業づくりに取り組む。 イ　電子黒板やプロジェクターなどの視聴覚機器を充実させることで視覚による情報を増やし、理解を促進させる。（研修を実施する）
事業目標	本校では「未来を変える意欲と学力」の育成を目標に、平成22年度よりPISA型学力を、平成24年度よりOECDのキーコンピテンシーを、学校全体で育成すべき力の具体的組織目標として明示してきた。現在は、その牽引役として教育課程内にコアカリキュラム授業群を設置するとともに、特別活動や科目選択（本校は総合学科）等の取組みも含めた全ての教育活動を、キーコンピテンシー育成のための手段として位置づけている。 コアカリキュラムとして以下の科目を設置している（全て必履修科目）。 〔１年次〕 ・ライフプラニング（産業社会と人間）　自分を知り、他者を知り、社会を知る。 ・視点・論点　現代社会を生きていくための基礎知識・教養を学ぶ。 ・論理演習　朝学モジュール形式（10分×5日）で、読解力・論理的思考力を身につける。 ※：教材として「論理エンジン」（水王舎）を活用している。 〔２年次〕 ・協働（前期）　グループワークで課題を解決する力を身につける。 （身近な社会である、学校や地域の課題を発見し解決に向けた方策をＰＴＡ，地域と連携して考え提案する。） ※：平成21年には杉並区立和田中学校元校長・藤原和博先生によるケータイを使った〝よのなか〟科の授業を実施した。 ・探求（後期）　与えられたテーマに基づいて、調べ方を学ぶ。 ※：平成27年度入学生より協働を通年科目に変更し、その中に探求の内容を包含する。 ・小論文　自分の考えをまとめ、相手に伝わる文章を書く。 ・論理演習　朝学（10分×５日）モジュールで、読解力・論理的思考力を身につける。 〔３年次〕 ・卒業研究　自分の興味・関心に基づいたテーマについて、資料を活用し、根拠を伴った論文を書く。 ※：平成27年度入学生より卒業研究に名称変更する。 ○総合学科である本校には約140の選択科目があり、コアカリキュラムをはじめとしてその大半が教科書のない科目である。生徒の興味関心に答える授業を展開するため、担当者は２時間連続の授業を独自に作成した教材で試行錯誤を繰り返しながら教えている。また、学校設定科目は２時間連続の授業であり、講義形式の授業で生徒の興味関心を引き出すことは難しい。 ○上記にあるように「視覚化・協働化・構造化」をキーワードにした授業改善の推進を図り、それが「生徒の学力の充実」「生徒の希望する進路の実現」につながるためにも、全教室にプロジェクターを常設するなど、以下のような視聴覚機器を導入して創意工夫あふれた授業ができるようチャレンジしたい。
整備した 設備・物品	○視聴覚教室　天吊り型プロジェクター　一式 ○電子黒板機能付きプロジェクター　22台 ○マグネットスクリーン　22台
取組みの 主担・実施者	上田　朗（教頭）、斉藤　勝（社会科、地域連携部長）
本年度の 取組内容	○「未来を変える意欲と学力」として、学校全体で育成すべき力の具体的組織目標とするOECDによるキーコンピテンシー育成をめざしたICTを活用した授業改善 具体的には ・コアカリキュラム授業群の実践成果を生かした、各教科・科目の授業改善、協働的で生徒主体の深い学習形態の深化 ・ユニバーサルデザインを意識した「視覚化・協働化・構造化」をキーワードにした授業改善の推進 ・上記のテーマを柱とした研究・公開授業の実施
成果の検証方法 と評価指標	学校教育自己診断における生徒・保護者の授業満足度の向上 具体的には、以下の設問によって検証する。 ①授業では、体験型授業やグループワークなど生徒が主体的に参加し、学習する意欲が高まる工夫がされている。 （アクティブラーニングの深化） ②授業では、物事を論理的に考え、表現する力を伸ばすための工夫が感じられる。 ③授業では、他者との協働を通して課題を解決する力を伸ばすための工夫が感じられる。 ④授業では、興味・関心のある分野について探求する力を伸ばすための工夫が感じられる。 （キーコンピテンシーの育成） ⑤授業では、視聴覚機器やコンピュータなどICT機器が活用されている。 （授業のユニバーサルデザイン化）
自己評価	学校教育自己診断における各項目の結果は、以下のとおりである。 ①保護者94.6%　生徒90.1%　教職員94.4%　②保護者87.9%　生徒76.6%　教職員75.0% ③保護者87.3%　生徒85.6%　教職員83.3%　④保護者89.4%　生徒77.5%　教職員80.6% ⑤保護者85.3%　生徒78.8%　教職員88.9% 上記の指標から、 ①整備されたプロジェクター等のICT機器の活用が進み、授業手法としてアクティブラーニングの有効性を十分理解するとともに、評価方法(ルーブリックの活用）の改善の視点からも授業の改善に取り組んだ。（○） ②③④保護者、生徒の数値が昨年度に比べ大きく向上した。本校がめざす、「育成したい資質・能力(キーコンピテンシー)]への理解が進み、本校が取り組む授業改革について評価され、今後さらなる授業改善を進めなければならない。（○） ⑤各教室に設置したことによって、各教員の使用頻度が飛躍的に向上したため、「視覚化・協働化・構造化」という視点での授業改善が進んでいる。（○）
事業のまとめ	「主体的対話的で深い学び」、アクティブラーニングの視点からの授業改革の必要性が高まるなか、従来から本校においては、「育成すべき資質・能力(キーコンピテンシー)」を３点明確に生徒・保護者に示し、教育改革を進めていた。牽引役として教育課程内にコアカリキュラム授業群を設置するとともに、特別活動や科目選択（本校は総合学科）等の取組みも含めた全ての教育活動を、キーコンピテンシー育成のための手段として位置づけていた。その成果をさらに進化させるため、今回の事業による環境整備は、授業改革への教職員の意識改革を進め、各授業における授業改革につながっている。来年度は年間方針として、アクティブラーニングを本格的に位置づけていくことを考えている。